

日 時	令和〇年〇月〇日（〇）
第 校 時	第〇校時 〇〇:〇〇～〇〇:〇〇
場 所	〇〇〇教室
指 導 者	〇〇〇〇

1 主題名

「手指の操作性と言語表出を高める学習」

2 対象児童

小学部〇年 男子

3 障害の状況

自閉症 知的障害（障害手帳 B）

4 児童の実態（資料参照）

- ・太田 stageⅢ－2
- ・「NC プログラム－発達記録チャート」 図 1 参照→略

5 児童観

本児は小学部 1 年生から在籍しており、自閉症と知的障害を合わせ有した児童である。太田の stage 評価では stageⅢ－2 であり、概念形成の芽生えの段階である。NC プログラムのアセスメントを見ると、下限領域が「数」であり、次いで言語の「言語表出」が低い。日常生活面では、相手に向けての発語は少ない。相手に何かを要求する際も発語は限定的で、要求するものを名詞のみ述べることが多い。上限領域は、「聴覚記録」と「読字」である。その他で、NC プログラムのアセスメントから読み取れることは「微細運動」で穴が多くみられる。また、医療機関で検査した JSI-R の結果によると、複数の刺激への偏りが認められた。特に聴覚の感覚領域において「Red」で過敏であるという結果が出た。前庭感覚と視覚の感覚領域も判定が「Yellow」と判定されており、多動や注意の散漫さが見られるという結果であった。日常生活では、指示理解が高いものの、注意の散漫さや多動性から指示を聞いていてもその通りに動けないことや別のことに注目して指示を聞きとれていないことが多くある。また、言語表出の発達の弱さから、自分の気持ちや要求を思うように伝えることができなかったり、うまく伝わらずにやりたいことができなかった経験も積み重なったりして、ルールや約束を守らずに衝動的に動いてしまうことがある。同じく医療機関で検査した新版 K 式発達検査では「認知・適応」と「言語・社会」の発達指数に差があり、領域内でも能力にバラつきがあることから、手先の不器用さがあるが視覚優位と考えられるという結果が得られた。日常生活面では箸やスプーン等握りで持つことが多く、筆圧も弱い。

以上のことから、本児は視覚優位であるが、手先に不器用さが見られる。聴覚に過敏があるものの、全体的な指示理解や言語理解は高い。持っている能力は高いが、注意の散漫さや多動性がみられることで集中して活動したり、指示を聞いたりして適切に行動することに困難さがある。言語理解は高いが言語表出が低く偏りが見られると考えられる。

6 主題観

児童観でも述べた通り、本児は手先に不器用さが見られる。また、保護者も箸の握り方を気にしている。その他、NC プログラムのアセスメントの「言語理解」と「言語表出」で偏りが見られる。また、自分の気持ちや要求を思うように伝えることができなかつたり、うまく伝わらずにやりたいことができなかつた経験も積み重なつたりして衝動的に動いてしまうことが増えている。本児は注意の散漫さや多動性が認められるが、指示理解や言語理解は高い。そのため言語表出を高め、言葉によるやりとりでの成功体験を積んでいくことで、児童観で述べた衝動性が軽減し、落ち着いて生活できるようになると考えた。また、本児が、活動を通して限定的ではあるが言語でのやりとりによる成功体験を増やしていくことで、日常生活で少しずつ正しい言語でのやりとりを般化していくことができると考えた。そこで児童観で述べた実態のうち、手指の操作性と言語表出を高めていきたいと考えた。手指を使う個別活動を中心に、本児が得意で集中して取り組める自立課題を取り入れていく。

7 指導観

これまでに述べた児童観・主題観から、ワークシステムを活用した机上での個別学習を展開する。課題の確認表をもとに教員から課題を受け取り、終わりの報告・確認チェックをしながら進める形式とする。ワークシステムの課題の最後には、「ごほうびタイム」として5分程度絵本を読む時間を設定する。また、注意の散漫さや多動性を考慮して、机の左右にパーテーションを設置することで、視覚的な情報を減らし、課題に集中して取り組むことができるように構造化した。

課題の確認表は、授業のはじめに確認し、1つ課題が終わるごとに「ごほうびピース」を確認表からはがして「ごほうびシート」につけるようにする。すべての課題が終わると「ごほうびシート」のパズルが完成し、「ごほうびタイム」に取り組むことができるようにすることで、本児の興味関心とモチベーションを課題に向けていけるように構造化した。

学習内容は、作業的な自立課題から始める。続いて、教員と一緒に取り組む勝敗理解とコミュニケーションの課題を行う。3×3のマスにイラストが描かれていて、蓋で見えないようになっている。教員と本児で順番に2個蓋を開けてペアのイラストが揃えば蓋を獲得できる。最終的に蓋の所持数が多いほうの勝利となる。順番に蓋をめくる過程やルールを確認する過程で教員とコミュニケーションを図る経験をできるようにする。また、課題中に話す言葉（こっちにします、どうぞ）を言語シートとして本児の見える場所に置いておく。やりとりを行う際に、本児が言葉に詰まった際はその言語シートを提示し、本児から適切な言語表出が出るように促していく。続いて、手指を使う課題として箸の静的三指握りの練習を行う。本児の好きな寿司を箸でつまんで、お皿へ移す課題であるが、ここでも教員とやりとりする場面を設定し、言語表出ができる場面を設定する。静的三指握りでは、補助具とシールを活用して適切な位置に指がきて箸を持つことができるようにする。

言語表出を高めるために、言葉によるやりとりでの成功体験を積んでいき、本児が気持ちや要求を適切に表現できるようになることで、衝動的な行動を軽減し、落ち着いた生活を送ることができるように指導していきたい。

8 指導目標

- ・教員との適切な言語でのやりとりを通して課題を進めることができる。
- ・補助具を用いて箸を正しく持つことができる。

9 展開（40分）

学習活動	指導・支援の手立て及び指導上の留意点	準備物
○始まりの挨拶 1分	・教員への注目を確認する。意識が向かない場合言葉かけで注目を促す。	課題確認表
○本時の学習を確認 1分	・背筋を伸ばすように必要に応じ「足」「姿勢」等の言葉かけで促す。	
○確認表の確認 1分	・確認表で本時の課題を確認する。	確認表 課題 言語シート ごほうびシート
○弁別課題 4分 ・ブロックを弁別して袋に入れる。	・教員から課題を受け取る。	
○勝敗理解・コミュニケーション課題 6分 ・3×3のイラストのペア探し。	・弁別用のシートに形ごとに合わせる。 ・シートにすべての形のブロックが揃ったら教員に「できました」と報告する。 ・教員が、ブロックが揃っていることを確認し、袋を渡す。全部で3セット作成する。 ・作業の手が止まっているときは「進めてください」と言葉かけをする。	
○確認表の確認 1分	・課題が適切にできたら称賛し、確認表のごほうびピースをごほうびシートへつける。	
○勝敗理解・コミュニケーション課題 6分 ・3×3のイラストのペア探し。	・初めに本時で使用する3×3のイラストを決める。複数ある選択肢から選択し、「これにします」と教員に伝える。言葉が出ないときは言語シートを提示する。 ・じゃんけんで順番を決める。勝った方を指差して「〇〇さんの勝ち」と言葉かけをする。 ・3×3のイラストをセットして1つずつ確認する。 ・順番に蓋をとっていく。ペアになっていないと何度も蓋をとってしまうことがあるのでその際は「だめです」と言葉かけをする。 ・自分の順番が終わったら「どうぞ」と相手に順番を譲る。言葉が出ないときは言語シートを提示する。	

○確認表の確認 1分	・課題が適切にできたら称賛し、確認表のごほうびピースをごほうびシートへつける。	
○身体部位の課題 3分 ・イラストと身体部位名のマッチング。	・自立課題なので見守る。 ・「できました」の報告があったら、すべて正解確認する。	
○確認表の確認 1分	・課題が適切にできたら称賛し、確認表のごほうびピースをごほうびシートへつける。	
○静的三指握り① 5分 お寿司の模型を箸でつまむ。	・「〇〇（寿司のネタの名前） いっちょう」と伝えることができたならそのネタの寿司の模型を渡す。言葉が出ないときは言語シートを提示する。 ・箸で寿司の模型をつまんで、お皿に移す。	
○確認表の確認 1分	・課題が適切にできたら称賛し、確認表のごほうびピースをごほうびシートへつける。	
○静的三指握り② 5分 モールを箸でつまみ器へ移す。	・握り方がずれてしまったときは、持ち方を確認するように言葉かけする。 ・器から器へ流し込んでしまうことがあるので、そのような時は「違います」と言葉かけをする。 ・1つ移せたらその都度大きく称賛する。	
○確認表の確認 1分	・課題が適切にできたら称賛し、確認表のごほうびピースをごほうびシートへつける。ごほうびシートにごほうびピースがすべて揃ったことを確認する。	
○イラストマッチング課題 3分 イラストとその輪郭のマッチング。 ○確認表の確認 1分	・自立課題なので見守る。 ・課題が適切にできたら称賛し、確認表のごほうびピースをごほうびシートへつける。ごほうびシートにごほうびピースがすべて揃ったことを確認する。	
○終わりの挨拶 1分	・教員への注目を確認する。意識が向かない場合言葉掛けや肩を叩くなどで注目を促す。	

○ごほうびシートの確認	5分	・シートに揃ったごほうびを「○○先生、ください」と伝えるように促す。	
-------------	----	------------------------------------	--

10 評価

○児童の評価

- ・課題が終わったら「○○先生できました」と報告することができたか。
- ・課題の中で設定した適切な言語で教員とやり取りすることができたか。
- ・補助具を用いて箸を使用し、寿司の模型を箸でつまんでお皿に移すことができたか。

○指導の評価

- ・アセスメントや実態からの課題設定は適切であったか。
- ・目標に対しての有効な内容であったか。